

令和6年度 第五小学校 学校評価シート

＜学校経営方針の重点＞ 1 豊かな心の醸成 2 確かな学力の向上 3 健やかな体の育成

	学校経営方針	具体的な内容	肯定的評価				評価	分析結果	改善策	学校関係者評価		学校見解と今後の方向性	
			教職員	保護者	児童	平均				評価	コメント		
1 豊かな心の醸成	「相手」を思いやり、共に認め合う子」の育成を目指す	よさに着目し、互いのよさを認め励ますことを通じて、思いやり	人権教育の推進を図る。自分のよさを実感させ、自己肯定感を高めるとともに、相手を大切にすることを育てる。	92	61	91	89	B	保護者の「分からない」の回答が13%と高く、学校の人権教育に関する取組への認知度や、取組それぞれの意義の理解度を高める必要性が感じられる。	たてわり班活動やいじめゼロの取組など、本校の取組を広く発信していくことや異学年交流による人権感覚の育成状況などを具体例を交えて発信していく。	A	・先生たちは、よく努力していると思う。児童の成長も見られて喜ばしい。保護者のモラルや人権感覚も養っていかねばならない状況も時折耳にする。 ・「分からない」評価は連続3年悪化が見られる。前年度実施の改善策の内容と結果再レビューも重要と考える。 ・思いやり、自己肯定感を育てる視点が大切である。	人権教育として今年度実施した「思いやりの木」（各クラス各学期1本）、「いじめ0宣言」、「展覧会等での異学年交流を通してのよさ見付けや感謝のメッセージ交換」等の取組を来年度以降も引き続き実施していく。さらに、教室配置をベア学年ごとに並べて配置し、日々異学年交流を通して人権感覚の育成を図っていく。
		道徳教育の推進を図る。夢や希望を育み、心の教育の充実させるとともに、社会で生きる土台を培う。	100	64			82	A	平日3日間に分散した道徳授業地区公開講座への参加者は、授業参観が計284名に対して、授業後の意見交流会参加者は計34名となっていて、道徳教育への理解を高める必要がある。	魅力的な意見交流の場の設定や、時程の工夫など保護者の参加しやすい会を企画し、道徳教育への関心を高めていく。	A	・今年度の道徳の授業及び意見交換に参加したが、非常に有意義に思った。 ・意見交換会への参加率が課題に挙げられているが、今年度のような少人数での意見交流であれば、保護者も参加しやすい。 ・学年を超えて保護者の参加を促すタイトル(例:保護者の道徳教育)等で工夫してはどうか。	道徳授業地区公開講座における、授業公開の目的は参観者の数からも概ね達成できている。もう一つの目的である意見交換会を通して、地域・保護者と連携して児童の道徳性を高めていくことについて工夫が必要である。令和7年度は、土曜日に全学年で授業公開と意見交換会を実施し、より多くの地域・保護者の方の参加を促す。
		特別支援教室や教育相談体制の活用を通じて、特別な支援を要する指導の充実を図る。	83	73			78	B	特別支援教育に対しての必要感が自覚されて初めて、その体制や仕組みについて関心を抱くことが予想される。必要感が得られて初めて、主体的な回答が得られるであろう。	教育相談体制の周知に力を入れ、些細なことであっても子育てに関して不安に感じることや、心配なことを相談できるということを発信していく。	A	・特別支援に関しては、保護者の理解が追いついていない状況が続いていると思われる。 ・相談体制の周知も含め特別支援教育の意味、必要性の丁寧な説明の継続を期待する。	保護者の子育てに対する不安や心配事に寄り添い、専門的な視点での支援を充実させていく。また、児童向けに特別支援教育理解教育を行ったり、スクールカウンセラーや外部機関など相談窓口を周知させたり、特別支援教育についての理解も促していく。
2 確かな学力の向上	自ら考え、共に学び合う子」の育成を目指す	主体的・対話的で深い学びの充実に向けて、授業改善を図る。	ICTを取り入れた教材の工夫やめあて・振り返りのある授業づくりを通して、児童の学習意欲の向上と基礎学力の定着を図る。	92	68	79	80	A	ICTの活用が直接的に学習意欲の向上につながったと結論付ける根拠が乏しく、保護者の肯定的な回答には結び付いていない。	学校公開や授業参観の場面で、ICT活用の有効性を示すことのできる事例を取り上げ、実態を観ることのできる機会を意図的に設定していく。	A	・教育現場におけるICTの本来の意図・目的に沿っての高度な活用に期待するとともに、ICTとはいえ、その使用方法の理解度の差により使用効果が異なることも考慮が必要である。 ・ICTの活用の仕方や基礎学力に課題のある児童がいる。個の課題が見られている。	一人1台貸与を受けている学習用端末の活用として、情報処理能力の向上を図ることだけでなく、教科等で育成を図るべき資質・能力に結び付け、より効果的に資質・能力の向上を図ることのできる活用場面を模索し、発信していく。
		考える場・話し合う時間の設定を通じて、考える力・表す力の向上を図る。	92	73	89	85	A	1単位時間に個人解決場面、集団解決場面を意図的に設定し、多面的・多角的に意見交流が図れるよう授業改善を行ってきた成果を、児童は感じ取っているようである。	教科ごとのねらいに迫るための学習活動の工夫や、目的に応じた話し合い活動の充実などを通して、思考力・判断力・表現力の更なる向上を図っていく。	A	・先生方は児童の意欲を喚起するための授業を工夫している。学校のもつ最重要テーマでもあり継続と充実に期待する。 ・児童は対話を楽しみ、グループ等で話し合って学ぶことに慣れてきている。	話し合い活動を授業内に意図的・計画的に取り入れていき、多面的・多角的に物事を捉えることを日常化させ、多様な価値観を包摂し、多様性を受け入れることのできる力を育んでいく。目的や相手、場面や方法について自問しながら思考し、判断し、表現できる力を養っていく。	
		読書貯本通帳・読書月間の取組を通じて、読書好きの児童を増やす。	100	64	64	76	B	活字離れの傾向は本校だけの特徴ではなく、日本全体的に課題となっているところである。本への興味・関心が高められるような工夫や、読書を奨励する取組が更に求められている。	昨本通帳の取組によって、読書量が増えたという一定の効果は毎年あるが、読書の量だけでなく質も高めていきたい。本のおもしろさや、奥深さに触れる機会を意図的に設定していく。	B	・本から得られる情報はICTで得られるものより正確である。ICTで得た情報を本を用いてトレースする。そのための本を探す。という楽しさを味わわせることが必要である。	「梅の郷読書貯本」の取組や朝読書、読書旬間、読み聞かせ等の活動を通して、「本が好き」「読書っておもしろい」という児童を増やしていく。文字から想像を広げることの楽しさ、本から得られる情報の豊かさに気付かせることに意図的に取り組んでいく。	
3 健やかな体の育成	指「指」を鍛え、自他の命を大切に「する子」の育成を目指す	で体力の向上と健康度の増進を推進する。自分の命は自分を守る	縄跳び旬間・持久走旬間などの一校一取組運動や休み時間の外遊び啓発を通して、体力の向上を図る。	100	89	86	91	A	持久走旬間や縄跳び旬間の取組が、運動のきっかけとなって体を動かすことの習慣化につながっているという一定の効果は認められる。	持久走旬間や縄跳び旬間の取組は継続させながら、たてわり班遊びやクラス遊びなど、中休みや昼休みの外遊びを推奨するような取組を仕掛けていく。	A	・休み時間の外遊びのきっかけをつくる仕掛けは多くの効果を生む。 ・ゲームで遊ぶより、外で思いっきり体を動かした仲間と遊ぶ体験をさせていってほしい。	体育的取組（持久走旬間、縄跳び旬間）や体育授業、休み時間の外遊びの推奨等を通して、体を動かすことの習慣化を図る。体を動かすことの心地よさ、運動後の爽快感など体験的に学ばせることで、更なる体力の向上を図る。
		保健指導の充実を図る。「元気チェックカード」や感染症対策を通じて、健康的な生活習慣づくりを進める。	100	76	90	89	A	元気チェックカードや歯磨きカレンダーの取組を通して、家庭と連携して児童の健康管理を進めていくことに対する一定の理解が得られた。	家庭と学校で連携を図りながら、児童の心身の健康と好ましい生活習慣の定着に力を入れて取り組んでいく。	A	・例年児童の肯定的評価が高値を示す項目で児童の意識付けは浸透している。家庭との連携は難しい面もあると思える。好ましい生活習慣の定着が図られる様に取組の継続に期待する。	元気チェックカードや歯磨きカレンダー等、効果が得られた取組については継続していく。メディアコントロール週間、家庭学習強化週間等の取組で、生活リズムを整えることについて家庭と連携を強め、児童の望ましい生活習慣の定着を図る。	
		日常の安全指導や避難訓練を徹底させ、命を大切に「する教育」の充実を図る。	100	82			91	A	毎月の安全指導や避難訓練の取組への理解が高まり、その効果についてよい評価を受けた。	実態に即した安全指導や避難訓練の実施を通して更なる安全指導の充実を図っていく。	A	・体験が伴う繰り返しの避難訓練を通じて、自分の命を守るための基本を身に付けられるよう、緊張感をもっての実施を引き続きお願いしたい。 ・能登の地震や東日本の地震・津波の話などを児童に伝えてほしい。	命を守るための行動について、「頭を守ること」や「動いてこない、落ちてこない、倒れてこない」場所に避難すること、火事で恐れることは「煙」であること、「煙は上に上がっていくこと」など基本的な視点を毎回与え、自身の命を守るための行動決定ができるように指導していく。
4 その他	「学校や地域を愛する子」の育成を目指す	家庭や地域との関係構築を進め、しっかりと	学校便りやホームページ、スクリレの活用を通じて、開かれた学校を推進する。	100	75			88	A	スマートフォンへのお便りの配信やオンラインで行う欠席連絡など、時間や場所に囚われず取り取りできるシステムの構築が評価された。	A	・ICT活用による連携は、積極的に推進を図っていただきたい。	地域・保護者の皆様に、本校の教育において大事にしている点や一緒に考えてほしい事柄について、児童の姿を題材に学校便り等で積極的に伝え、地域・保護者の皆様から信頼される学校づくりを目指す。
		教職員の専門性を発揮するとともに、一致協力して教育活動にあたる。	92	66			79	B	保護者の「分からない」の回答が21%と高く、教員それぞれの専門性が発揮される場面や協力して指導している場面を観てもらう必要性が感じられる。	学校公開や授業参観を通して、それぞれの教員の専門性が発揮される場面や協力して指導している場面を参観できる機会を設定していく。	A	・小学校授業での教員の「専門性」が見えにくい。授業を参観する機会の設定とともに授業に支障のない範囲での“参観のポイント”の様なガイドを保護者に事前に知らせておく様な工夫があってもよい。	学校公開等授業を参観していただく際は、地域・保護者の皆様にとっても分かりやすい学習指導案となるよう工夫し、専門性が発揮される場面や協力して指導している場面を見ることが出来る機会を設定していく。教科担任制を実施可能な範囲で取り入れ、それぞれの専門性の向上を促す。
		行事や授業の連携を通じて、西中学校区や幼保・様々な公共機関との交流を推進する。	92	60			76	B	保護者の「分からない」の回答が27%と高く、中学校区ごとの取組への理解度を高める必要性が感じられる。	幼稚園や保育園との連携、中学校区ごとの連携、関係諸機関との連携などの情報について、更に広く周知させていく。	B	・小中合同研修会等にて協力・連携して児童を支えていることが伝わっていない。研修内容の周知、参加の検討が必要となっている。「これは行事や授業の連携/交流である」ことをもっと強調してもよい。 ・幼保、小中の合同の取組は有意義であった。	いじめゼロの取組や挨拶運動等、西中学校区の三校で連携して行っている児童の取組について、地域・保護者に伝える機会を増やし、その様子だけでなく連携の意義や取組の効果などについても保護者会等で伝えていく。